日本初!〈社会組織〉〈コミュニティデザイン〉〈グローバル・リスクガバナンス〉3つの分野を学べる大学院

立教大学大学院　21世紀社会デザイン研究科

Social Designer

vol. 32

巻頭インタビュー

人工知能科学と社会デザイン
――コラボレーションの可能性を考える

2020年4月に新たに設立された立教大学人工知能科学研究科で、研究科委員長を務める内山泰伸教授に、人工知能科学と社会デザインとの関わりについてお話をうかがった。

【インタビュアー:中村陽一 21世紀社会デザイン研究科教授】

「技術的な側面とソーシャルな側面の両者が協働して考えていかないと、社会課題は解決できないのではないか」

内山 泰伸（うちやま やすのぶ）さん

立教大学大学院人工知能科学研究科委員長・教授。イェール大学物理学科 Postdoctoral Associate、JAXA宇宙航空プロジェクト研究員、スタンフォード大学・SLAC国立加速器研究所 Panofsky Fellow、立教大学理学部物理学科准教授、同教授を経て、2020年4月より現職。2018年、先端テクノロジーのベンチャーGalaxiesを起業。

中村 陽一（なかむら よういち）

一橋大学社会学部卒業後、編集者、消費社会研究センター代表、東京大学客員助教授、都留文科大学教授等を経て現職。社会デザイン研究所所長。社会デザイン・ビジネスラボ会長。80年代半ばより現場と往復しつつ市民活動・NPO／NGOの実践的研究、基盤整備、政策提言に取り組む。ソーシャルビジネス・ネットワーク常任顧問。「座・高円寺」劇場創造アカデミー講師。ニッポン放送『おしゃべりラボ～しあわせSocial Design』パーソナリティ。『3・11後の建築と社会デザイン』、『新しい空間と社会のデザインがわかる ビルディングタイプ学入門』等編著・共著多数。

―― 人工知能科学研究科とは

中村／最初に、人工知能科学研究科について、内山先生から概要をご紹介いただいてもよろしいでしょうか。

内山／立教大学人工知能科学研究科は、2020年4月に新しく設立された研究科です。

ご存知のとおり、「人工知能」という単語は、社会で、本当にさまざまなシーンで実際に目にしたり、聞いたりすることがあると思うのですけれども、この数年で急速に発展した分野です。しかも、単に急速に発展しているというだけではなく、人類の文明史を考えても、かなり大きな変革を社会にもたらすだろうと。現在、そういうレベルの急速な人工知能技術の発展がまさに進行中で、それとほぼ同時並行で、いわゆるビッグデータを活用するデータサイエンスも勃興してきている。実は、この二つの分野はお互いに密接に結び付いていまして、両者が絡み合いながら急速に発展しているというのが現状ですね。

そのような背景のもとで、この両分野を主たる学びの対象にした、あるいは研究の対象にした研究科を新たに設置しようということになりました。データサイエンスを学習・研究できる学部はいくつか誕生しつつあるものの、まだ本当に限られた大学にしかありません。本研究科では、それに加えて、もう一つの柱として人工知能というテーマを掲げています。人工知能を大きく掲げた研究科というのは日本でも初めてになります。今のところ、第二の例が出るという話はまだ聞こえてこないので、しばらくは日本で唯一の研究科になるのかなと思っています。とはいっても、何年かたてば、第二の例は出てくるのかなとも思いますが。

人工知能科学研究科の特長ですが、「機械学習・ディープラーニングの本格的な学習」、「『リベラルアーツ × AI』による革新的な研究と人材育成」、「産学連携による『社会実装』プログラムの充実」、「AIの社会実装に向けた先端科学技術の倫理を学習」、「昼夜間開講形式で、社会人も学びやすい環境」という5つの点を重視しながら、教育研究を展開しています。

―― 重なり合う人工知能科学と社会デザイン学

中村／人工知能科学は、非常に幅の広い大きな分野ですが、同じくかなり幅の広い社会デザイン学とは、かなり重なり合う部分があると思っていまして。日本には、文系・理系という伝統的な二項対立があるのですが、人工知能科学研究科の一期生の割合を見ると、その割合は半々で、その二項対立的なものを越えていく学問分野、あるいは実践ではないかと思います。21世紀社会デザイン研究科もこうした「文理融合」のあり方をめざせればと私は考えています。

また、個別のテーマを考えても、いま、いたるところで盛ん

に言われているSDGs（持続可能な開発目標）の分野などは重なりますよね。それから、AIと哲学も実はかなり深いつながりがあると思いますし、ソーシャルインパクトを重視して、さまざまな研究や実践の成果を踏まえて社会実装を行っていこうというスタンスも共通している。両研究科には、社会人対応の独立研究科としての共通性や可能性が、かなりあるんじゃないかなと思っています。

それから、研究科の性格や運営方法などもそうですね。たとえば、学生たちが自発的に色々な形の提案をしたり、運営にも関わっていくところとか、色々あるんじゃないかと思うのですが、内山先生はどのように見ていらっしゃいますか。

内山／教員の人数を考えると、これだけ幅広い分野をやりたいという学生たちを、教員の側から一方的に教えるのは難しいので、もともと学生側に主体性を求めないかぎり成り立たないとは思っていまして。そういう現実的な話もありますし、やはり大学院のレベルになってくると、いかに主体的に学ぶかということが、結局は、本当に身に付くかどうかの分かれ道だと思っています。

ですので、学生側が能動的、主体的に動けるということを重視しています。たとえば、学生が自分たちで考えた企画として、バーチャルキャンパスツアーがあります。第一期生たちは、実を言うと、4月に入ってから、キャンパスにほとんど来れていないという状況だったりするんですよね（※2020年度の春学期は、新型コロナウィルス流行への対応として、授業は全てオンラインで行われた。また、学生のキャンパスへの入構も大幅に制限されている）。せっかく入学したのに、立教のキャンパスを歩けていないということで、立教出身の学生たちが自分たちで企画して、キャンパスのバーチャルツアーをできるようにしたりとか、ですね。

中村／ありがとうございます。そういう運営の部分では、われわれも思い当たる節が非常にありますし、いまお伺して、大変共感しました。

―― コラボレーションの実現に向けて

中村／ちょっと内容のところで、SDGsの話に戻るのですが、SDGsの17のターゲットでいえば、基本的には環境課題にまずは対応し、負荷を減らす。次に、経済のありようを変えていき、そして社会的なありようを変えていく。そこでの成果を評価し、レポーティングをして、新たな資金調達、ESG投資的なものにつなげて、地域インパクトを拡大してゆく。このフィードバックを繰り返すわけですね。

こういうプロセスにおいても、おそらくAIは、基本的なところで関わってくるんじゃないかなと思うんですね。たとえばこういうところならばソーシャルな動きと絡めていけるかもしれない、といった可能性について、何かお考えはありますか。

内山／実は、人工知能科学研究科では、最初から社会課題の解決を中心に据えています。人工知能とデータサイエンスの技術は、「技術のための技術、研究のための研究」ではなくて、いかに社会課題を解決していくかという、あくまでもそのための技術として位置付けています。

21世紀社会デザイン研究科のみなさんから見ると、社会課題の解決というのは、当たり前すぎて言うまでもないことかもしれません。しかし、エンジニアや私たちの分野のサイエンティストの世界だと、そこは必ずしも当たり前ではなくて、むしろ、そういう社会とは切り離された活動として研究をすることが大事だという伝統的な考え方も、実はある程度はあったりします。より正確にいえば、100年後の世界で役立てばいいだろうとかそういう感覚で、要するに時間軸を長く取っているということだと思うのですが。

こういう考え方だけですと、すぐ目の前にある現実の社会課題の解決には、なかなか結び付かない研究になってしまうので、われわれは遠い将来を見据えた研究もよいのだけども、むしろもっと近い、目の前にある喫緊の課題を解決していきましょうという目的を設定しています。

SDGsは、まさにそういう部分と、すごく近いところにあると思っています。現状、日本の社会はサステナブルではないという危惧が、強くあるわけですよね。これらを解決していくという意味で、私たちもSDGsの分野に非常に興味を持っていますので、そこで21世紀社会デザイン研究科ともシナジーが生まれるのではないかと思います。

また、たとえば車の自動運転が良いのか悪いのかと言われても、そのこと自体をちゃんと検討するのは、それはそれですごく骨の折れることで、社会に対する深い洞察、まさに社会デザインが必要になるわけですよね。われわれのほうではなかなか答えを用意するのは難しいですし、もちろん答えがあるのかどうかさえもよく分からないのですけれども、そういったところを一緒に考えていただけると良いかなと思います。社会デザインをご専門とされている方々と議論したり、あるいはお知恵をお借りしたりしながら、AIをどう社会に活用していくかという、その方法について検討する。今後は、まずそこでご一緒できれば、こちらとしては非常にありがたいですね。

中村／ありがとうございます。AIあるいはITといった言葉には、世間一般の受け止め方としては、やっぱりハードとか技術とか、そちら方面のイメージがまだまだ強いですよね。しかし、いま内山先生がおっしゃったように、制度とか社会の仕組みとか、あるいはさまざまなソフトとの兼ね合わせやフィードバックを考えてゆくと、やはり技術的な側面とソーシャルな側面の両者が協働して考えていかないと、おそらく社会課題は解決できないのではないかなと。ぜひ、両方の研究科の教員はもちろんですけれども、院生の皆さんも一緒になって、ワークショップや、協働型の事業などができるとよいですね。そういった中から、何か一つでも二つでも、社会実験・社会実装にダイレクトにつながるようなものが出てくると、両研究科の存在意義もさらに増してくるのではないでしょうか。そのあたりについては、これからぜひ相談させていただければと思います。

神田 裕子 さん
（かんだ ゆうこ）

大学講師を経て心理カウンセラーとして起業。EAPカウンセラーの養成と派遣を手がける。50歳を機に会社を譲渡後、心理領域の研究を継続。現在はメンタルヘルス等の研修講師として活動中。博士課程前期2年。中村ゼミ所属。

目からうろこの学生生活

入学してからの1か月間は、未知のカタカナ用語に翻弄され続けました。それでも学生食堂で同期生と情報交換をするうち、しだいに慣れていきました。心理学では個人の抱える課題に焦点を当てますが、この研究科では「社会デザイン的に現象を捉える」という視座がとても新鮮でした。

私の研究対象は、刑務所等で受刑者の話を聴く「教誨師」です。そして犯罪加害者の家族へのバッシングにも関心を持っています。卒業後は受刑者とその家族を支援するNPO法人を立ち上げるつもりで画策しています。出所後、再犯につながる主たる要因は「貧困と孤立」です。限りある施設内の活動において教誨師に何ができるのか、また社会的資本が再犯防止にいかに有効であるかを追究し続けたいと思っています。宗教家であることが条件の教誨師を志望しているため、1年次に得度式を終えました。しばらくは資格を得るための修行が続きます。

この研究科では専門分野の領域を越えて、先生たちにアドバイスを求めることが可能です。無作為に講義を選択・履修したはずなのに、なぜか学期ごとに共通テーマが見つかり、気づきを得ると同時に新たな問いも生まれました。世界一美しいこの校舎で、好きな研究と実践を重ねられることに感謝をしながら、あと半年!　学生生活を謳歌したいと思います。

大原 康子 さん
（おおはら やすこ）

劇団員、編集者、広告代理店営業を経て結婚・出産。専業主婦期に夫が他界。現在は、母親たちが在宅でWEBや小冊子などの制作を行うクリエイティブマムズリンク代表。3人の息子の母。博士課程前期2年。萩原ゼミ所属。

自分に与えた「学ぶ機会」

私は6年前まで専業主婦でしたが、ある日突然夫が他界し、シングルマザーになりました。そうなってみて初めて、「どうして女性はこれほどまでに働きづらく、生きづらいのだろう」ということに気が付きました。――ひとり親でも、清潔な住まいを持ち、栄養のあるご飯を食べて、子供たちに十分な教育を与えたい――この願いを叶えることの困難を知りました。この困難は、私たち家族だけの問題ではなく、多くの母子世帯が抱える社会課題です。社会課題の当事者となったからこそ、「課題解決につながる事業を起こしたい。そのためには多くの学びが必要だ」と考え、大学院入学を決意しました。私は大学を卒業していないので、院入学のための資格試験を受けています。

研究テーマは、「シングルマザーの働き方」についてです。特にフリーランスとして働くことの可能性について研究しています。卒業後には研究を生かし、女性が生涯を通して仕事を持ち、望む人生を歩むことをサポートする事業を起こす予定です。学生生活は素晴らしい先生方と仲間に恵まれ、とても充実しています。日々に多くの学びと喜びがあります。このタイミングで「学ぶ機会」を自分に与えて本当によかったと思っています。

上沼 祐樹 さん
（かみぬま ゆうき）

大学卒業後、KADOKAWAでの雑誌編集をはじめ、ミクシィでニュース編集、朝日新聞社で新規事業に従事。10年前から複業としてメディアプランニングにも関わる。スポーツを軸にイノベーションあるものを研究中。大熊ゼミ。

「思考を学ぶ」ことを重視

メディア業界に携わること18年。雑誌、新聞、WEBと様々な媒体を経験でき、次は何かと考えた時に、明確な目標が見つかりませんでした。情報過多の時代、さらに選択が難しくなったことを記憶しています。

そんな時に立ち返るのが、「やじろべえの法則」。高校時代のサッカー部指導者の教えです。指導者の言葉を守って何かを習得した後はそこから離れて、別の教えを学ぶというもの。「チーム戦術」の後に「個人戦術」を習得するようなもので、やじろべえのように左右に揺られながら、どちらの景色も見ながら習得するのです。その2つの距離が遠い方が、学びが多いというもの。その指導のおかげか、何の取り柄のない公立高校が大阪府3位までに。

そんな法則をいま当てはめたら……、「仕事」の対極が「大学院」だったのです。それほど、縁遠い選択肢でしたから。ただ、大学院では、普段、読まないような文献に向き合ったり、知見をもった教授や学生らと意見を交換したり、新鮮な刺激と教養があふれていました。ここではあまり成績を追求せず、「思考を学ぶ」ことを重視。毎日の授業や研究で、せっせと「個人戦術」を習得中。似た者のような「チームメイト」に出会えたのも大学院のおかげです。

今井 敏晴 さん
（いまい としはる）

メーカーで主に輸出業務に携わり、なかでも後払い出荷製品の債権回収のリスクヘッジとその新たな仕組み作りを邦銀、外銀とともに行ってきました。早期退職後は、立教セカンドステージ大学を経て、博士課程前期2年。若林ゼミ所属。

新たな自分を創造する場所

立教セカンドステージ大学では、学生時代には思いもよらなかった、学ぶことの尊さと贅沢さに気づかせてくれました。仕事を覚え、業務対応をし、組織を管理し、人を評価して、目標を遂行していく、そうした仕事も学びである筈です。にもかかわらず贅沢と感ずるのは、各自が純粋に求めた知の希求が、一方的に与えられたものではなく、ましてや学んだことを数値で評価されるものでもないこと。学究するテーマを探し、自身で答えを出さなければならないという真摯な知の仕組みのなかに自らを投ずることにあるのかもしれません。この環境は、さらに本格的な学びに目覚めさせ、自ら見つけたテーマをもっと深く掘り下げようと「大学院」というステージへと押し上げました。

研究テーマは、制限された環境下での表現についての考察で、具体的には、ハンセン病療養所での入所者たちの表現が、社会とどのように反応しあって表出しているのかの研究です。きっかけは、ハンセン病療養所がある島を芸術祭の舞台のひとつに選んだ「瀬戸内国際芸術祭」にあります。ここに潜む問題の社会的意義を明らかにしていきたいと考えています。ただ、このテーマは、これまでの仕事の延長でもなければ、生活圏に関わるものでもない、きわめて挑戦的なものですが、新たな自分を自分で創り上げていく貴重な知の営為だと思って取り組んでいます。

知識だけでなく心も豊かになる学び

2017年卒
室田 真希 さん
（むろた まき）

関西大学卒業後、（株）ゆうちょ銀行に入社し、店舗での業務経験を経て、本社コンプライアンス部門に配属。2016年11月よりリスクマネジメント会社にてESG等コンサルティングに従事。2017年3月、博士課程前期課程修了。

本研究科に進学するきっかけは、「ムロ太の好きなコンプライアンスの研究ができる大学院があるよ」というワークショップデザイナー仲間の一言でした。当時、私は銀行のコンプライアンス部門で全社員に対するコンプライアンス研修の企画等を担当していました。いかに「やらされ感」や「押しつけ感」がなく、社員一人ひとりの主体性を引き出すような形でコンプライアンスの推進をしていくかに関心があり、双方向のワークショップ型の研修が効果的なのではないかと考え、ワークショップについて学んでいるところでした。そこで、コンプライアンス研修に関して、漠然とした自分の考えを論理的に整理できたらと考え、進学を決意しました。

在学2年目には、リスクマネジメント会社に転職し、コンプライアンスだけでなく、ESG／CSR／SDGsのコンサルティングに携わるようになりました。大学院で学んだ知識はもちろん、大学院で出会った方々とのつながりが業務において大変助けになりました。

大学院での2年間を振り返ると、様々な出会いがあり、“学術分野と実務の両方を行き来する重要性”や“学ぶこと自体のおもしろさ”に気づくことができたと感じています。視野が広がり、視点が増え、視座も高まり、多くのことを学べました。特に、授業やフィールドワーク等を通じて福祉分野の社会課題を知るにつれて、地域活動や認知症の方の支援に関わりたいと思うようになったのは、私にとって大きな収穫でした。今では、地域活動をしているNPO等を支援するプロボノへの参加や、認知症の方との絵画の対話型鑑賞がプライベートにおける活動の一つです。企業のコンプライアンスの研究から、まさかここまで自身の関心や活動の範囲が広がるとは思っていませんでした。知識だけでなく心も豊かになったように思います。本研究科で学ぶことができ、本当によかったと感じています。

大学院生活で、私は変わった
―生涯学び続けること―

2019年卒
山崎 宇充 さん
（やまざき うじゅう）

1967年生。IT、メディア企業の役員を歴任し40歳で独立。企業再生、新規事業、事業承継、地方創生などのコンサル、スポーツマネージメント会社経営などを手掛ける。現在は、東京メトロポリタンテレビジョン株式会社常務取締役。その他、社会デザイン研究所研究員、三重県志摩市創生委員。2019年3月修了。

多くの業界で新たな事業創出に従事したことで、一種の“高慢さ”を纏い、識者の意見や論調に耳を貸さず、頭の中で常に持論を展開していた自信家の私は、ウォフォード・カレッジ学長ベン・ダンラップ氏が語る「生涯学び続けること」（YouTube:TED 2007）を見て、大きく考え方が変わった。そして、50歳で大学院へ、私の周囲の人達は皆耳を疑った。

慣れ親しんだ経済学ではなく、幅広い知を求めて21世紀社会デザイン研究科を専攻したのだが、これが大正解であった。知らなかった、必要ないと思っていた分野に接すると次第に関心を持ち始め、関連する本を読むとこれが面白い。仕事との両立は正直厳しかったが、学ぶ楽しさがそれを上回った。

地方創生に関わっていたこともあり、2009年から増加傾向にあった都会から地方に移住する若者の行動心理を修士論文の題材にした。便利な都会から若者は何故地方移住するのか？　という疑問、移住者たちへのインタビューによって一つの答えに出会う。

「東京に暮らしていると、私がいなくなっても何の影響がないと感じていた。今この地に暮らしていると地域の人が私を必要としている、と実感できる。」旅やボランティア活動などで出会った場所が居心地良く移住する。人口減少に悩む地方は、移住者に対する感謝の気持ちがあり、移住者自身も地域・人に必要とされているという都会では感じなかった承認欲求を充足できる。

修了した今も、そんな小さな社会の小さなバランスによって、少しずつ地方が変わっていくのではないかと期待している。

講義、レポート、研究、そして修論作成と慌ただしい2年間だった。年齢、経験の異なる仲間たちとの交流により様々な価値観と出会えた。修了後、仲間たちは仕事やボランティアで、学んだことを実践していることだろう。

私も大学院修了後に、ヘッドハンティングで大手電機メーカーの役員への就任が内定していたが、いろいろ考えて今の会社に入った。社会デザイン学の実践の場として、テレビで社会をどう描くか、そんな探究心と欲求を持って頑張っている。

ベン・ダンラップ氏は講演の最後に、「知と経験に対する決して消えることのない不屈の欲求が、思い描く未来の形を作る」と力説していた。

私も社会の一員としての役目を果たしながら、一生懸命研究を続けていこうと思う。

河口 眞理子 特任教授
（かわぐち まりこ）

2020年4月より立教大学特任教授・不二製油グループ本社CEO補佐。一橋大学大学院修士課程修了（環境経済）後大和証券入社。1994年より大和総研転籍。2010年～2011年大和証券グループ本社CSR室長広報部担当部長を経て、2011年7月大和総研に帰任、2018年12月～2020年3月まで大和総研研究主幹。アナリスト協会検定会員、国連グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン理事、日本サステナブル投資フォーラム共同代表理事。エシカル推進協議会理事、プラン・ジャパン評議員、WWFジャパン理事。環境省中央環境審議会臨時委員（2018～）など。著書「ソーシャルファイナンスの教科書」生産性出版など。

コロナ禍の中、2020年4月に着任し、21世紀社会デザイン研究科の雰囲気をオンラインで吸収中の身です。私は、学生時代から、環境問題の元凶は環境負荷を外部不経済として無視する不完全な市場経済にあると考えていました。市場を学ぶため大和証券に入社、米国市場暴落のブラックマンデーや日本のバブル相場を実務として経験し、京都議定書のころから大和総研にて企業の社会的責任（CSR）,SRI（ESG投資）についての調査研究に従事してきました。

90年代のCSRとESG投資の揺籃期では、企業の投資家も「環境や社会貢献はコストであり、企業評価にはマイナス」というのが常識でした。その中ではNPOの立場も利用しつつ企業のCSR活動や投資家のESG投資の取り組みを働きかけてきました。意識は社内NPOという感じで、社会をサステナブルにするために、企業には、エコ・エシカル製品など本業におけるCSR活動を、投資家はCSRを評価するESG投資の導入を、10年以上働きかけてきました。

しかし結果が出ない。実は消費者がエシカル製品を率先して買わないとCSRは企業価値にならず、投資家も投資できない。社会をサステナブルに変革するためには、CSR（企業）ESG投資（金融）、エシカル消費（消費者）が三位一体で動かなければならない。2010年ごろからは、サステナビリティ総論としてCSR、ESG投資、エシカル消費の調査研究情報発信を行うようになりました。しかしこういう議論は一部の専門家にとどまり、エシカル商品も大手スーパーやコンビニで見ることはほとんどありませんでした。

しかし2015年にSDGsやパリ協定が締結され、ESG投資も広がり始めてサステナビリティに対して社会の関心が高まってきました。今ではフェアトレードなどエシカル商品は気軽にコンビニでも扱っています。一方で気候変動の被害が急拡大し、そしてコロナ禍が起きました。このコロナの悲劇をサステナブルな社会への転換のトリガーとし、コロナで浮き彫りになった課題も解決できるサステナブル社会2.0について5年間ともに学んでいきたいと思います。

三浦 建太郎 特任准教授
（みうら けんたろう）

社会福祉法人にんじんの会理事・特定非営利活動法人AIMS理事。東京大学文学部心理学科卒業,立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修士課程修了,国際医療福祉大学大学院博士課程修了（医療福祉学）。高齢者介護領域でのICT活用の研究に加え,子どものグリーフケア・路上生活者支援・児童養護施設で生活する子どもの学習支援等,生きづらさを抱える人を支えるための様々な実践活動に従事。

研究領域は、福祉介護情報論。特に高齢者介護の現場におけるICTの活用です。講義では、自身の研究領域に加えて、福祉の現場での実践活動、例えば、生活困窮者支援、グリーフケア等の現場の知見を踏まえ、「生きづらさ」を抱える人を支えていく方法について、学生の皆さんと一緒に考えていきます。学生の皆さんにお伝えしたいことは、当事者目線での共感と想像力の発揮と、現場から一つずつ積み上げ継続していくスタイルの「社会デザイン」視点です。

「ICT ビジネス」 の世界から、「福祉の実践活動と研究」 の世界へ

長くICTビジネスの世界で仕事をしてきました。就職情報サイト、コミュニティサイト、家族向けSNS、支援者間の情報共有アプリなど、ICTを活用した様々な仕組みを作り、世の中に提案してきました。その根本には、人が社会で生活していく中で、より良い判断をし、良く生きていくために、適切な情報を手に入れることができる環境をどのようにして作るか、という問いがありました。「福祉」という領域は、ICTビジネスとベクトルの異なる価値観の世界のようですが、私にとっては、自身の問いをさらに追求する領域であり、人が生きやすい社会を作るための工夫と取組を実践する場です。

それぞれの人が、もう少しだけ、社会のためにできることを積み重ねる

「生きづらさ」に対応していくための様々な福祉の実践活動があります。それぞれの領域で、カリスマ的なリーダーシップを発揮しオピニオンリーダーとなる方もいます。こうした人が、社会を動かす力となるのかもしれません。しかし、私が願うことは、こうしたリーダーが活躍すること以上に、日常生活を暮らす一人ひとりが、もう少し「生きづらさ」を抱える人への共感と想像力を持ち、少しでも自身にできることがあれば取り組んでみる、おかしいと感じることがあれば声を上げる。そういう社会になっていくこと。自分たちが暮らす社会を、自分たちで良くしていくことを諦めない。小さな取組の積み重ねが、福祉を進化させる原動力であると信じています。

新しい空間と社会のデザインがわかる
ビルディングタイプ学 入門

中村陽一・高宮知数・五十嵐太郎・槻橋修／著
誠文堂新光社
A5判／256ページ／2020年5月発行
定価:3,520円（税込）

建築を専門にする一部の人を除いて、わかるようでいて自信を持って説明することはできない、「ビルディングタイプ」はそんな言葉かもしれない。本書での説明は簡潔である。「ビルディングタイプとは、建物の種類である。（中略）図書館やオフィスという風に、どのような用途なのかを軸にして分けたものを意味している」。その上で本書は「初めての人のために、社会デザインと空間デザインが初めて一緒に取り組んだ、ビルディングタイプを学ぶ初めてのテキスト」であると、自らを位置づけている。

建築を専門とする筆者の知識が及ぶ範囲での話になってしまうが、ビルディングタイプという言葉が日本の建築ジャーナリズムにおいて頻出し始めたのは1990年代に入ってから。ちょうどその頃、社会学者山本哲士がイヴァン・イリイチやピエール・ブルデューを土台にして「建築社会学」という言葉を使い始め、建築でいうビルディングタイプ論に近い言説を重ねていた。しかし氏が元々教育学出身だったこともあると思うが、そこに登場するビルディングタイプは学校や病院といったところが主だったし、論点はかなり絞られていて可視不可視の権力と施設との関係、だったように思う。

そこにきて本書の試みはもう少し広範で、論点はより実践的であると言えるだろう。登場するビルディングタイプは住宅、オフィス、学校、図書館、美術館、公園・広場に加えて緑地の話も出てきて読者の多様な専門、興味に応える。歴史的な押さえから現代における社会学的な理解、さらには形而上学的な話、工学的な話、あるいは現代の法制度の話まで登場してきて、結果的にかもしれないが論の探究にも様々な観点・手法があり得ることがわかるであろう。「初めて一緒に取り組んだ」「初めてのテキスト」としての役割は果たせているのではないかと思う。

それにしても何というタイミングでの出版だろうか。共著者である五十嵐太郎へのインタビューに新型コロナウイルスの話が一文出てくるが、他の章は全てコロナ禍以前に書かれた（あるいは構想された）文章だと思われる。章立てられた住宅、オフィス、学校、図書館、美術館、公園・広場、これら全てが今まさにその使われ方についてコロナ禍の影響を受けている。住宅メーカーなどの設計の現場では既にクライアントからテレワーク向けのプランニングを要求されるケースが増えているという。全てのビルディングタイプは歴史的に住宅からの分化である、とも言えなくもないはずだが、昨今のコロナ禍は、ICTの発達によって様々な施設の役割が住宅内で済んでしまう、奇しくもそんな可能性を見せているのではないだろうか。その変化の種子は以前からあったとも言えるし、そのための技術も既にあったとも言えるのだが、禍に順応することによって社会がこれほど短期間に変化した姿を見せたことについて、ビルディングタイプ学としても言うべきことが多く出てきたはずである。そんな状況下における本書の位置づけを改めて問うならば、ビルディングタイプ学をコロナ禍前後で考える折のベンチマーク、ということになるのであろう。

（大川信行）

善とは何か
西田幾多郎『善の研究』講義

大熊 玄／著
新泉社
四六判／400ページ／2020年4月発行
定価:2,970円（税込）

はじめての大拙
鈴木大拙　自然のままに生きていく一〇八の言葉

鈴木大拙／著　大熊 玄／編
ディスカヴァー・トゥエンティワン
200ページ／2019年7月発行
定価:1,430円（税込）

21世紀社会デザイン研究科には、その設立当初から、哲学を専門とする教員がいます。現在の哲学担当教員・大熊玄准教授が、ここ1年で二冊の本を出版したので紹介します。

著者は、もともとインド哲学・仏教学の研究者で、原典（サンスクリット語）に対して批判的解読を試みる文献学者でした。その後十数年間、石川県にある「西田幾多郎記念哲学館」の学芸員、金沢大学の非常勤講師として、西田幾多郎や鈴木大拙の哲学・思想を研究し、2015年に立教大学に赴任しました。この西田幾多郎と鈴木大拙という二人は、ともに近代日本を代表する世界的な哲学者・思想家で、2020年は二人の生誕150周年にあたるため、多くの書籍が出版され、雑誌でも特集企画が編まれています。

そのように多く出版されている中で、この二冊に共通している特徴は、読者がこの二人を知らなくとも理解できるように書かれ編まれている、ということです。著者は、もともと博物館で一般来館者に対する展示・企画の作成や講座・説明をする学芸員であり、また、この社会人向け大学院の教員として5年間教員を務めています。この二冊は、そうした著者の経験に基づき、哲学的な専門用語ができるだけ使われずに、読者が専門知識を持たなくとも読めるような工夫がされています。

『はじめての大拙—自然のままに生きていく一〇八の言葉』は、鈴木大拙の言葉を集めた初学者・初心者向けのアンソロジーです。大拙は、世界に禅（ZEN）を広めた仏教学者で、戦後のある時期においては世界で最も有名な日本人でした。彼は、漢籍で書かれた禅の思想を、日本においては日常的な日本語で、欧米では各地の大学で英語で講演をし、感銘を与え、多大な影響を与えています。そんな大拙の言葉のなかで、現代社会に生きる私たちにも有意義な言葉が、「社会デザイン」という観点からも価値のある言葉が、一〇八つ選ばれ、配置・編集されています。構成は五つの章に分かれ、それぞれ、(1)「自然のままに、自由に生きる」、(2)「機械にとらわれず、美と愛に生きる」、(3)「知性・言葉とともに、無心に生きる」、(4)「苦しみや矛盾のなかを生きていく」、(5)「禅の悟りは、いわゆる『宗教』ではない」として、各章の冒頭には簡潔な導入・解説が付されています。

西田幾多郎の『善の研究』は、近代以降の日本人が書いた中で、世界で最も読まれている「哲学書」です。この『善とは何か—西田幾多郎『善の研究』講義』は、博物館での市民講座やこの社会デザイン研究科での授業の中身がそのまま反映された、講義形式の入門書となります。この元となる『善の研究』は、魅力がありながら難解でもあり、これまで多くの読者が挫折してきましたから、この「講義」では、そうした挫折経験者が最後まで読み進められるように、これまでで最も丁寧で詳細な解説がなされています。もともと『善の研究』それ自体が、いわゆる哲学愛好家や研究者だけを対象としたものではなく、そうした専門性の垣根を越えて多くの一般人読者を獲得した、時代を超えたベストセラーです。ですから、解説でも、哲学の専門性の中に閉じこもるのではなく、私たちが実際にこの社会を生きていくうえで、どうしたら「より良く（善く）生きていけるのか」を考えることを目的としています。この生きづらい社会で、私たちが自分の生き方をデザインする、そして自分が属するこの社会をデザインするときのヒントになるような、哲学入門書です。

立教大学社会デザイン研究所 大和ハウス工業株式会社寄付講座

文化の居場所を考える
—21世紀の文化の容れ物 変容するビルディングタイプ

主催 社会デザイン研究所　共催 21世紀社会デザイン研究科　協賛 大和ハウス工業株式会社

社会デザイン研究所では、各々の伝統的ビルディングタイプが担っていた文化的背景とそれとは異なる空間デザインが登場した社会的変化や今後について、ビルディングタイプごとに見ていくとともに、現代の社会デザインと融合した新しい使われ方を生み出す方法論についても紹介していく、ユニークかつ文理融合学際型テーマの講座を開講致します。当講座は今年3年目を迎え、昨年度の立教大学コラボレーション科目『文化の居場所を考える』講座では300名程の受講生を対象に開講。その他、横浜市での2泊3日の学生WSや研究会を開催し、ビルディングタイプへの考察に加え、学生や企業、一般の方との交流の場を提供してきました。

今年度は、コロナ禍の社会情勢を考慮し、オンラインを基本とするワークショップや研究会を開催予定です。また、秋学期より、全学カリキュラム、コラボレーション科目として木曜4時限（15：20～17：00）に『ビルディングタイプ』『建築家は何をするのか』『商店街・ショッピングボール・Eコマース』『シェアオフィス』『サードプレイス』『幼稚園・保育園』『複合文化施設』『災害と復興』『マルチハビテーション』『ゲストハウス・カプセルホテル』『公園』『エリマネ・BID』といった12テーマを扱います。その他、今春出版した『ビルディングタイプ学 入門』のオンライン版刊行や、デジタル化をテーマとした研究会を定期的に開催予定ですので、一般の方や他大学の学生の方も、是非ご参加下さい。

第13回 タクティカル・アプローチ
左：高宮知数／立教大学社会デザイン研究所研究員　右：槻橋修／建築家（ティーハウス）神戸大学大学院准教授

問合せ先
寄付講座・文化の居場所事務局（月、水～金 11:00～18:00）
TEL/FAX：03-3985-4725
MAIL：ibasyo-kouza@rikkyo.ac.jp

進学相談会のご案内

本研究科に興味を持たれた方向けに、年4回進学相談会を開催します。教員によるミニ講義、教員・現役生との個別相談会を予定しています。
＊2020年度日程：第3回 2020年9月26日（土）、第4回 12月5日（土）

（詳しくは研究科ホームページをご覧ください）

入学試験概略

博士課程前期課程

■入学定員	50名
■入学試験実施時期	秋季（10月）と春季（2月）
■対象	受験資格を有する者。（出願資格の内容は入試要項をよくお読みください。要項は11月上旬頃に公開されます。）
■試験区分	一般、社会人、外国人
■選考方法	一般：書類審査、筆記試験、口頭試問の成績を総合的に評価して行う。 社会人：書類審査、口頭試問の成績を総合的に評価して行う。 外国人：書類審査、筆記試験、口頭試問の成績を総合的に評価して行う。

博士課程後期課程

■入学定員	5名
■入学試験実施時期	春季（2月）
■その他	出願資格は前期課程と異なりますので入試要項をよくお読みください。要項は11月上旬頃に公開されます。

研究科・入試に関するお問い合わせ

立教大学独立研究科事務室　shindaigakuin@rikkyo.ac.jp

発　行／
立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集長／萩原 なつ子
編集担当／
中森 弘樹・木戸 さやか
発行日／2020年9月17日
〒171-8501
東京都豊島区西池袋3-34-1

More Information

21世紀社会デザイン研究科では、講演会やイベントの情報をホームページでお知らせしております。

21世紀社会デザイン研究科ホームページ
https://sds.rikkyo.ac.jp/

21世紀社会デザイン研究科 Facebook
https://www.facebook.com/21csd/

デザイン：(株)ペンシルロケット